

冥途の家族
富岡多恵子

講談社

富岡多恵子

冥途の家族

昭和四十九年六月二十八日第一刷発行

著者 富岡多恵子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社／東京都文京区音羽二―一二二／郵便番号／一二二
電話／東京（〇三）九四五―一一一（大代表） 振替／東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社



© Taeko Tomioka 1974, Printed in Japan 落し本・乱し本はおとりかえいたします。

定価はカバーに表示してあります。(文1)

目次

地藏和讃仕方咄 5

餓鬼の晩餐 67

冥途の家族 123

極楽通り極楽番地 185

装帧
菅
木志雄

冥途の家族

地蔵和讃仕方咄

緑色の蚊帳のなかで、ふく子は父親にしがみついて寝ていた。父親の兼吉は酒の息を吐き、かるい鼾をかいているが、ふく子の脚が腹の上にとつぜん置かれたりすると、目をさまして、おい、行儀よう寝んかい、とふく子の脚を蒲団に落とす。兼吉は酒の勢でねむってはいても、まだ深いほんとうのねむりに入っていないからか、それとも自分の腕を枕にして、胸にしがみついている幼い娘の重さのせいか、ふく子がちよつとでも動くと鼾が止んで、なにか喋るのである。ふく子は五歳にしては背が高く、よくひとに、もう学校へ上っているとまちがえられることもあり、近所のいたずら坊主に、落第、落第とからかわれることもある。それくらいに背は高いが、なんといつてもまだ五ツなのだから、父親に抱かれて寝ても、ふく子の脚は父親の膝にやつととどくくらいである。

父親は浴衣の前をはだけ、上を向いてねむっているが、いつも寝る前にはふく子を抱きしめ

て、おかつぱ頭の、真直な髪を撫でてくれる。

へええ艶してる。人間はな、髪の毛の艶がええと、からだも丈夫や。お前のんは、艶もええし、真直やもんな、根性も真直やわい」といったりしながら、兼吉は娘の頭を撫でる。ふく子は父親の両腕のなかで、こういう言葉を遠い声のように聴きながら、胸に顔をつけ、その奥でひびいている心臓の音に驚く。

へお父さん、ええ匂いや」とふく子はいう。

へ酒くさいか」と兼吉は笑う。

へちゃう、ええ匂いや」といいながら、ふく子は鼻をふんふんいわせて父親の胸をあちこち嗅ぎまわる。

へこら、やめんかい、こそばいやないか」と父親は娘を大げさにはらいのける真似をする。

へ夏やから、なんぼ風呂へ入っても、汗くさいのんは、しゃあないわい」と兼吉は笑う。

へふく子、早よ寝んと、お母ちゃんに怒られるぞ」といいながら、また、ふく子を両腕のなかへ入れてくれる。

父親の両腕、両脚にかこまれると、なにか籠のなかへすっぽりはまったような安心がふく子におとずれる。父親の腕と脚と胴体でつくられた籠のなかにいるかぎりは、どんなことが起っ

でも安心しておれる。その上頭を撫でられ、ほめられ、時には歌までうたってもらえる。どんな無茶な我儘をいっても叱られることもない。この宇宙を——勿論、五歳の子供に宇宙などということはわからないが——独占したような気分で、父親がいるかぎりこわいものはないのである。それに、父親はいい匂いがする。お母ちゃんより、ずっとええ匂いや、とふく子は感じている。それに、お母ちゃんの匂いを、ふく子はそんなに強く感じるほどいつも抱かれたことはない。

ふく子にとって、父親の腕と脚にかこまれてねむっている時、或いはまた父親の膝のなかに坐って、父親といっしょになにかを食べたりする時は、だからまさに至福の時である。こんな安心、こんな幸福は、おそらく一生涯この女の子にふたたびおとずれることはないだろう。それに、父親の腕のなかや、アグラをかけた脚のなかにいる時だけでなく、もっと他にも至福の時がある。父親がいるかぎり、ふく子の欲しいもので手に入らぬものはない。あれをかうて、と子供なりの媚びをふくんだいい方をしなくても、アレ、と指をさすだけでいいのだ。或いはまた、コレ、といっておもちゃ屋から大きな人形をひっぱってきて、ただそれでよかった。

へ幼稚園で、どんな歌教せてもろたんや、うとうてみい」と父親はいう。

へ幼稚園の歌なんか嫌いや。もう幼稚園なんかいけへん」とふく子はいう。

「幼稚園で、そないにおもろないか」

「幼稚園なんか嫌いや。もう、うちやめる」

「そやけど、ひとつぐらい歌を覚えたやろ」

「お手エテンブラ、つーないデコチャン、野みいちをゆーけえバリカン——」

「おもしろい歌やなあ。お手エテンブラ、つーないデコチャン、野みいちをゆーけえバリカン、か」

こんな無茶苦茶をいっても、ふく子は叱られない。毎朝、近所の女の子が門口まで誘いにきてくれるのに、その子を持たせて泣きわめくふく子を、叱ったり、なだめたりして母親は幼稚園へやる。そして二、三時間たつと、大きな泣き声が聞え、それが門口に近づき、幼稚園の小便さんの背中で大粒の涙をこぼして泣きわめくふく子がそこにいるのである。ここに、お父さんがいたら、もう幼稚園へはいかなくていいといってくれるにちがいない、とふく子は思うけれど、いつもその時父親はいないで、母親のカナキリ声をするだけなのだ。

しかし、毎日の、ふく子のくり返しに、母親の方の根もつきて、二ヵ月ほどでふく子は幼稚園をやめた。それはふく子を苦痛から解放した。幼稚園では、ふく子はなにをしていいのかわからぬから、いつも茫然としているのである。子供たちは群をつくって遊ぶのに、ふく子は群

からはぐれてしまう。意地悪もされないが、意地悪する術もない。まるで、知恵の遅れた子のように、子供たちの群を眺めているだけである。要するに、そこでは、ふく子は宇宙を独占できないのだ。たくさんの子供が他におり、その子供たちと、宇宙を分けあわなくてはならないのであるが、それにはどうしたらいいのかわからない。それに、幼稚園のセンセも、手助けしてくれないではないか。さあ、みんなと遊びなさいね、と何度もいうけれども、その、みんなと遊ぶことができぬ子に、それは無茶というものではないか。お遊戯の途中で、とつぜん大声で泣きだすふく子の手をひっぱって、さらに群からはずすのもセンセではないか。そこへ飛んできて、背中におぶってつれて帰ってくれる小使のおじさんだけが、ふく子には救い主なのである。

へふく子、幼稚園やめてどないする」と兼吉は夕食の酒を飲みながら、例によってアグラをかいた脚のなかに娘をいれていう。

「横川のおっちゃんとかへいくわ」とふく子という。

横川のおっちゃんは、兼吉の知りあいの、習字塾のセンセである。一度、兼吉につれられてそこへいった時、細長い机に男の子や女の子が正座して字を習っているのをふく子は見たことがあった。しかも、横川のおっちゃんはおもしろいおっちゃんだった。センセの感じてなく、仕

出し屋かなにかのおっちゃんだった。字を習っている男の子や女の子も、楽しそうだった。それになにより、その男の子や女の子は、みんないっしょに遊んでいるのでなく、ひとりひとりで字を書いていた。横川のおっちゃんがそのひとりひとりの後にまわって、ひとりひとりの手首をもって動かしたりしていた。そしてその度に、おっちゃんがなにかおもしろいことをいうのか、手首を握られて筆を動かす男の子や女の子が笑うのだった。

「横川はん、うちの娘がな、あんたとこに入門したいいうてききまへんねん。まだ、学校へもいっとらん子供やけど、ええかいな」と兼吉はふく子をつれていって、おっちゃんにいった。「入門やなんて、兼さんは相変らず大きなことをいいますね。いつでもきて下さいよ。なにしろ、うちはお客さんがきてくれないと商売になりませんから」と横川のおっちゃんは笑った。「ふく子、ほんまに、くるか？」と父親は娘に念を押している。

「へくる」とふく子はいう。

「へふく子ちゃんは、お父さんに似合わず、出来のいいお子ですね、兼さん」と横川のおっちゃんは笑いながら、ふく子の頭を撫でる。

「横川はん、五ツから字イ習いたいいうんやから、神童でっせ、この子は」と兼吉も笑っている。

へあのね、ふっ子ちゃん、スミとスズリと、フデをね、お父さんに買ってもらって。それから大きな紙ばさみもね。紙はうちにあるからいいんだよ」と横川のおっちゃんはふく子と同じ背になるために、しゃがみこんで喋っている。

へほんなら、おっちゃん、うち、くるわ」とふく子という。

へおっちゃんいうことあるかいな、ふく子、センセやぞ、このひとはセンセやないか」と兼吉はふく子にいう。

へまあ、よろしいですよ、今日は。ふっ子ちゃん、明日からおいで。ひとりでこれるだろ、近いんだから」とセンセはいった。

これで、毎朝の、ふく子の泣き声もひびかなくなった。ふく子は大きな紙ばさみと硯箱をさげて、一丁ほどある習字塾へ毎日通っている。一日も休まない。はじめは古新聞紙に、一、二、三ばかり書かされたが、ひと月もすると、あいうえお、を教えてもらったから、たいへん得意である。三重丸の時は、半紙を紙ばさみにいれて家まで走って帰る。一刻も早く、母親に見せるためである。ふく子は、ほめてもらうのが大好きであり、横川センセはいつもほめてくれるから大好きなのである。

その横川センセは、元は船員だということである。外国航路の船にも乗っていたことがある

ので、少し外国語も喋れるという噂であるが、それがどうして習字塾のセンスをしているのか、この町のひとは知らない。それに、横川センセは、兼吉よりもすこし年上の、五十歳近い年齢であるが独身である。どこか小粋な感じは仕出し屋かなにかのおっちゃんのようなのであるが、きちんと洋服を着ると、お洒落で、服が板について身のこなしが軽ろやかだから、手品師のような感じもする。

兼吉が横川センセと知り合いなのは、なにも特別に親しい友人というわけではなく、この町は狭いから、たいていのひとは知り合いであって、小学校の先生も、お医者さんも兼吉は知り合いなのである。だから、ふく子が幼稚園をやめて、横川センセのところへ字を習っているのも、兼吉の知り合いはみんな知っており、兼やんとこの娘はんは幼稚園はケツワリした（中途でやめた）けど、それは幼稚園が字を教えてくれないから嫌だといってやめたのだ、という評判になって伝わり、親に似ぬえらい子だ、という噂となってひろがっているのである。

幼稚園の女の先生は、さすがに兼吉の知り合いではなかったが、ふく子のいく小学校の男の先生のおおかたは兼吉と知り合いである。そのためかどうか、この父親は娘の入学式にもついていった。その数日前に、大きな百貨店へ娘をつれていき、あまりその町の、近所の子供が着ていないような垢ぬけした上等の服を買った。冴えた紺色で、衿と袖口に赤と白のふちどりが